

=====
本メールマガジン[NEE Mail Magazine]は、経済教育ネットワークより会員の
皆様にお送りしております。
=====



◆ NEE Mail Magazine 114号 ◆

-----2018-7-2◆◇

七月、文月です。旧暦の文月(新暦7月下旬から9月初め)には、曝書といって蔵書をひろげて日にさらすところから文月という名前になったとのこと。新暦文月は、学校では期末考査の時期になります。さすがにこの時期は、教科書もマーカーなどで汚れ始めているかもしれません。一方、先生たちは成績処理と通知表作成と目の回るような忙しさが続き、書に目をさらすことができない季節でもあります。曝書ができるようになるくらいの知的環境を学校は確保したいものです。そんな夏休み前の季節、今月もネットワークの活動を報告するとともに、授業に役立つ情報を提供いたします。

【1】最新活動報告

18年6月の活動やニュースを報告します。

【2】イベントカレンダー・情報紹介

部会の案内、関連団体の活動、ネットワークに関連する情報などを紹介します。

【3】授業のヒント「身近な事例には毒がある」

【1】最新活動報告

■東京部会(No.101)を開催しました。

日時:2018年6月27日(水) 19:00~21:20

場所:慶應義塾大学三田キャンパス研究棟 446 会議室

内容の概略:参加者 12名。

(1)「新テスト問題を視点に授業改善を考える」に関する報告が行われました。「夏休み経済教室(東京高校)」での講義内容に関して、佐藤英司先生(福島大学)と鍋島史一氏(教育実践研究オフィスF)から報告内容の提示と検討がおこなわれました。新テスト大問3を素材として、経済学からの解説と授業改善提案、教育学からの解説と授業の改善提案が行われる予定です。

(2)「夏休み経済教室」に関する報告がありました。

鈴木深氏と岡部ちはる氏(ともに東京証券取引所)より、6月25日段階での受付状況と現在の準備状況が報告されました。申し込み数は【2】の「イベントカレンダー」欄に掲載されています。

(3) 実践報告・教材提案関係として以下の報告と検討が行われました。

a) 杉田、金子先生の授業づくり発表の紹介と検討

金子幹夫先生(神奈川県立三浦初声高校)より、杉田孝之先生(千葉県立津田沼高校)とのコラボで「夏休み経済教室(東京高校)」発表する予定の内容が紹介されました。

b) 杉田・河原先生の授業提案の検討

同じく「夏休み経済教室(東京中学)」で発表が予定されている、杉田先生と河原和之先生(立命館大学他非常勤講師)による「ウソッ! ホント授業の作り方ー日常の話題から“経済概念”を素材としてー」のプロット概要が杉田孝之先生から報告されました。河原授業づくりの秘密に迫るという試みであり、これまでにはなかった内容となることが期待されるものであることが確認されました。

c) 塙先生発表の内容紹介

塙枝里子先生(都立府中東高校)から「夏休み経済教室(大阪)」で発表が予定されている「エコノミストとつくった三つの授業」の内容紹介がありました。

(4) 東証の書籍の紹介と新しい教材の検討がありました。

鈴木深氏より、東京証券取引所が編集して昨年12月に発行された『証券市場誕生』(集英社)の紹介がありました。江戸時代からの証券市場の歩みをわかりやすくまとめてあり、授業の参考にもなる書です。

岡部ちはる氏より、東京証券取引所が開発中の新教材の概略が紹介され、そのなかの二つのテーマに関する内容の検討が行われました。中学生向けに授業の導入で使えるような教材を目指したもので、さらに検討を加えて使いやすいものを目指すことになりました。なお、「夏休み経済教室(東京中学)」で一部が紹介されます。

(5) 冬の経済教室、年次大会を統合して実施します。

12月に行ってきた「冬の教室」と3月に行ってきた年次大会に関する検討を行いました。その結果、12月の冬の経済教室と3月の年次大会を統合し、来年3月16日(土)に「経済教育シンポジウム」を慶應義塾大学で開催することになりました。

内容に関しては、「行動経済学を経済教育にどのように活かしてゆくか」を仮テーマとして、今後講演講師、授業提案者などを詰めてゆくこととなりました。

部会内容の詳細は以下をご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/meeting/tokyo/tokyo101report.pdf>

■大阪部会(No.59)を開催しました。

日時:2018年6月30日(土) 18時00分~20時00分

場所:同志社大学 大阪サテライト

内容の概略はまとまり次第HPに掲載いたします。

【 2 】イベントカレンダー

<イベント予定です。(開催順)>

■先生のための夏休み経済教室の申し込み状況です。

2018年先生のための夏休み経済教室の申込状況(6月25日現在)は以下の通りです。

(内は昨年同期数)

申し込み数はほぼ昨年並みですが、さらに参加者数を増やすために、お知り合いの先生方に一声かけていただければと思います。

8月2日(木)	名古屋中学向け	29(19)
8月3日(金)	名古屋高校向け	25(25)
8月6日(月)	大阪高校向け	59(43)
8月7日(火)	大阪中学向け	67(53)
8月9日(木)	東京高校向け①	97(110)
8月10日(金)	東京高校向け②	92(99)
8月16日(木)	東京中学向け①	96(105)
8月17日(金)	東京中学向け②	92(85)

・各会場の共通テーマを「授業づくりのノウハウを提案する」としています。また、東京会場では、「経済学で読み解く世界・日本の今、そして教育は」のテーマで、財政や金融、労働に関する講演も用意しています。

・今年も、新しい気持ちで、豊富でかつ深められた内容のプログラムを準備しています。

■経済教育ワークショップ【北見】

2018年10月9日(火) 北海道北見北斗高等学校で行います。

内容の概略と参加方法は以下をご覧ください。

<定例部会のお知らせです。(開催順)>

■東京部会(No.102)を開催します

日時:2018年9月15日(土) 14:00~16:30

場所:慶應義塾大学三田キャンパス研究棟 446 会議室

申し込み方法は以下をご覧ください。

■札幌部会(No.20)を開催します

日時:2018年9月15日(土) 14時30分~17時00分

場所:キャリアバンク セミナールーム

<関係団体のお知らせです。>

・金融広報中央委員会「先生のための金融教育セミナー」(2018/8)

https://www.shiruporuto.jp/education/event/container/kyoin_seminar/2018/tokyo/

・金融広報中央委員会作文・小論文コンクール

<https://www.ron2018.jp/>

【 3 】授業のヒント

■身近な事例には向き・不向きがある

経済の授業だけでなく、社会科、公民科の授業では「身近な事例から導入して興味を持たせる」という言葉を良く聞きます。

たしかに、自分とは遠い世界の政治や経済の話が聞かされてもすぐに興味を示す生徒はそれほど多くないのは実際のところ。その点で、日常のコンビニや商店での買い物、遊園地の入場料などが経済学習では、生徒にとっての身近な事例となることは十分にうなずけます。

(1) 身近な事例は難しい

ところが、身近な事例から経済の価格の働きや市場の仕組みを説明するとなると結構難しい手続きや議論が必要になる場合が多いのです。

それにもかかわらず、ある中学校の教科書では、価格に対する疑問という導入例として次の事例をあげて、「商品の価格は、どうして高くなったり安くなったりするのだろうか。」と問いかけを生徒にしています。

その事例とは以下のようなものです。

「映画館で、前売り券と当日券の料金が違うのはなぜ？」

「ディスカウントストアの方が、一般の電気店より家電製品が安いのはなぜ？」

「シーズンになると観光地のホテルの値段が高くなるのはなぜ？」

「閉店間際のスーパーで値引きするのはなぜ？」 などです。(一部省略をしています)

これって正確に理由を理解するのは結構な難問です。

(2) キャベツ農家の思いと行動は

教科書ではここから需要量、供給量、価格の関係について考えようというかたちで一挙に抽象の世界に飛んでゆきます。

その時に、具体から抽象への媒介として使われるのが、身近と思われているキャベツです。

ところが、事例として取り上げられたキャベツは、需要側の気持ちや行動は比較

的理解させやすいのですが、供給側（農家）の気持ちや行動を生徒に説明すると結構困難にぶつかります。

教科書では、「価格が（高い・低い）とたくさん売りたいけれど、（高い・低い）とあまり売りたいくない」という農家の人の言葉がでてきて、考えさせる構成になっています。

本当に、農家のひとがキャベツを巡ってそう考えるか、中学生だけでなく、教える側の教師でも「？マーク」が付きそうな発言です。例えば、作ってしまったものを安いから売りたいくないという気持ちになるかどうかです。

これは、市場という高度で抽象的な概念をむりやり具体的な事例で説明しようとするとところのつまずきといえるでしょう。

(3) どうするか

身近な事例から興味を持たせるという方向は間違えないとしても、よほど事例を注意するか、その事例をきちんと説明することが教える側にできていないと、実際にその説明まで教えるかどうかは別として、自信をもって生徒に接することは出来ない相談となります。

では、どうするか。

一つは、きちんと理論を踏まえることとなります。需要で言えば、需要量と需要の違い、需要曲線上の変化とシフトによる価格変化の違いなどを理解させる方向を目指す道です。場合によっては弾力性の概念なども加わります。その際のキーワードは、「モデル」ということと、「その他の条件は一定である(ceteris paribus)」です。ただしこれをやると薄められた経済学になりかねません。

もう一つは、常識をひっくり返すような事例を選んで、ビックリさせながら、値段の不思議さや効果を体験させることです。この場合は、ある程度理論的な正確さは犠牲になりますが、うまく事例を精選すると概念形成の道が開けるようになります。

(4) 乞うご期待

今年の夏休み経済教室では、この二つの道に関する問題提起と実践事例の提案がなされる予定です。

講演講師の先生方がどんな提案をするか、解説をするか、教室に参加をされてご自身で確認していただければと思います。

それにしても、取り上げた教科書を使っている全国の多くの先生は、この具体的事例に対してどんな解説を生徒にしているのでしょうか、なお、事例の解説は次回としますが、新井君は正確に答えられるかな。（新井）

追記（篠原総一）

(5) 「身近な事例」考

適切な例を使うことで生徒の理解が深まることは、改めて指摘するまでもありません。経済教育ネットワークも、これまで、数多くのすぐれた授業案や教材を公表してきたところです。しかし、「経済のこと」には身近な例を見るだけでは想像すらでき

ないほどベールに包まれた現象も数多く存在します。たとえば、需要と供給の学習を進めるうえで、コンビニやスーパーマーケットでの経済活動は身近な例として観察できますが、商品がそこへ届くまでのプロセスは、生徒にとっては抽象的な現象であるはずで

す。ましてや金融政策のあり方など、経済全体に係わる学習内容を扱う際、議論は抽象的にならざるをえないものです。

結局、身近な例から学ぶという学習と、抽象的な「理論」や「知識」を通して理解を深めるという学習には、何を学ぶかによって向き不向きがあるようです。

経済教育ネットワークでは、このような点について皆さんと一緒に議論を深めていきたいものです。

【 4 】編集後記(みみずのたはこと)

世の中は、ワールドカップで盛り上がっています。一般新聞でもスポーツ新聞なみに日本チームの活躍をでかでか取り上げています。でも、これって一種の目くらましではと思ってしまいます。2020年にはこれがもっと大規模になるの

でしょう。
某大臣が「新聞を読まない人間は自民党支持者だ」と迷言をはきましたが、新聞を読んでも、よほど眼光紙背に徹しなければ世の中の大きな動きは分からない時代になってきているのかもしれない。(新井)

=====
登録に心当たりのない方、今後配信を希望されない方は下記会員ページより
お手続き下さい。

<http://www.econ-edu.net/aboutus/contact.html>

◆◇

編集・発行 : 経済教育ネットワーク

----- (C) Network for Economic Education ◆◇